真に救いようのない人

楠崎 龍照

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

醜く、そして、この世で最も、真に救いようのない人の物語。

目次

8月の夏休み
1話　楠崎龍照 ―― 1
2話　バーベキュー ―― 8
3話　遊び ―― 44
4話　散歩という名の旅 ―― 61
5話　卒業論文討滅戦 ―― 81

8月の夏休み

1話　楠崎龍照

大学生になって3年目の夏休みに入る前の期末試験最終日の帰りに、私はN駅の近くにあるNBと若者たちから呼称されているエリアに足を踏み入れた。

12時に終わり、時間が有り余っている私は、リラックスをしたいと思い、中古ゲームショップやトレーディングカードを取り扱っている店等が立ち並ぶ場所。

このエリアに立ち寄ったのだ。

カードゲームが好きな私にとっては天国のような場所だ。

セミの合唱と車の走る音、同胞たちの声が混ざる中、私はイヤホンを耳にさして音楽を聴きながら、駅の近くにあるカードショップに足を踏み入れる。

「さて、私が探してあるカードはあるだろうか……」

私はスマホの電源を入れてメモ帳を確認する。

そこには、私が欲しいカードのリストが表示された。

電車に乗っている間、デッキ必要なカードを調べてメモしたのだ。

「えーと、ヴァルキュルスの影霊衣、トリシューラの影霊衣……ブリューナクの影霊衣

……」

私はショーケースに入ってあるカードを眺めながら、自分のほしいカードを探した。

そして、私はメモ帳アプリを起動し、そのカードの値段を記録する。

ＯＲを称されるこのエリアは大小様々なカードショップがたくさんある。

一番値段の安い店でほしいカードを買って、出費を1円でも安く済ませたい戦法である。

３０分間、ＯＲを巡り巡った結果、何とか２０００円ほどで出費を抑えることに成功した。

用が済んだ私は、Ｎ駅から電車に持って自宅へと帰った。

「たでーま」

自宅についた私は、真っ先にリビングへと向かい手洗いをしに行く。

「おかえりー！」

と母が言う。

私は手を洗いながら「ふぃー」と一息入れながら「テスト終わったー。９月まで休みや」とやり遂げたような口調で言う。

母は「テストどうやった？」といつものように私に聞いてくる。

「まぁ、普通やな。去年と変わらん」

私の大学の学部のテストの大半がノートやレジュメが持ち込み可となっている。
それゆえ、基本的に授業を確り受けてふざけた解答をしなければ、大体は受かる。
「まー、こっから夏休みよ。やっとやぁぁぁぁ……」
私は背伸びをしながら自室へと戻る。
そして、自室へと戻った私は高校生の頃に妹から頂いた長財布に入れていた買ったカードを取り出す。
そして、透明スリーブからカードを抜いて、黒いザラザラしたスリーブに入れ直した。
そしてそれをデッキに組み込んで、少しだけ微笑んだ。
「よし、影霊衣デッキ完成!!」
私は高らかにそういった。
遊戯王というカードゲームは前のルール変更により、私は一時的に遊戯王をやめていた。
しかし、最近になってもう一度再開した。
それで、デッキを作り直しているのだ。
私はスマホからＬＩＮＥのアプリを取り出して中学からの友人たちのグループ（３人）に、こう書き込む。
『影霊衣デッキ完成』

すると少ししてから、友人たちが『おー』や『おめでとう』という返事が返ってきた。
私は『いえーい』と返答し、スマホをベッドに置いてリビングへ向かう。
「今日の飯なに？」
と母に聞く。
母は、少し考えてから「昨日の残りでいいんじゃない？」と言ったので、私は「りょーかい」と言った。
別に私は食べれたら問題ないので、ぶっちゃけなんでもよかった。
時刻は3時ちょっと過ぎたところ、私は再び自室へと戻り、ベッドに置かれてあるスマホを手に取ってとあるゲームアプリを起動する。
対魔忍ＲＰＧというゲームだ。
詳細は言わない。
言えるわけがない。
そのゲームのイベントを１０分ほど周回し、それを終えるとメモ張に書いてある自作の小説を書き始める。
タイトル名は「闇英雄」。
邪悪に支配された人々が様々な次元や世界を行き来して自由に楽しむ物語だ。
中学2年生から書いてる小説。

今まで様々な小説（らしきもの）を書いているが、今も書き続けているのは、この闇英雄だけだ。

「今日か明日には書き終えたいな」

私は、独り言を呟きながら文字を打っていく。

筆がなった……。というより腕がなった結果３０分以上小説を打ち続け、何とか物語1話分が完成した。

達成感に浸っていると、私はあることが脳裏を過る。

「あ、やばい、卒業論文やらんとあかんやん!!」

そう私はいま大学４回生。

来年卒業するのだ。

その卒業の為に卒業論文という訳のわからないことをしなければならない。

マジでこれ誰が考えたんだよと、私は肩を下す。

正直言ってこれほどやりたくない物などそうそうないだろう。

そして、私はあることが頭に浮かぶ。

卒業論文の提出は来年の1月の中旬、今は7月中旬。

まだやる必要はないのでは?

とささやいてくる。

まぁそれもそうだ。
私はベッドに寝転がり、再び対魔忍ＲＰＧを起動していまやっているイベントを完遂しにかかった。
何時間やっただろうか。
気づけば外は薄暗くなっており、母の飯と呼ぶ声が聞こえる。
私は、アプリを閉じてリビングへと急ぎ足で向かう。
「腹減ったー。飯―」
そういいながら、テーブルの椅子に腰かける。今日の飯は昨日の残りのキャベツの煮つけにシャケ、豆腐、サラダ＋αでみそ汁とご飯となっている。
「いただきます」
私は手と手を合わせていただきますをして箸を持った。
「はーい、頂いちゃってください！」
母の声に反応しつつ、私は出された飯を完食する。
味の方は言うまでもない。
普通においしい。
まぁ、私は大体出された飯は美味しいと言って完食する舌を持っているので、私の味に関する感想はあまりあてにできない。

何でもかんでも美味しい美味しい言いながら全部食べるので。
「ごっつぉーさん！」
手と手を合わせてそういった私は、ショッキを台所に置いて自室へと戻る。
そして、タンスから風呂上りの部屋着を取り出し、シャワーを浴びに風呂場へと向かった。
シャワーで1日の汚れを落とした私は、バスタオルで全身を拭き、自分の部屋に戻った。
時刻は8時。
私はＰＣを起動し、とあるオンラインゲームを始めた。
「さて、やるか……」
現在、行われているイベントを周回するため、ここから0時までオンラインゲームにのめり込んだ。
「ふぅー……。もう12時か……。そろそろ寝るとするか……」
私はオンラインゲームを閉じてＰＣをシャットダウンした。
そのまま、わたしは部屋着から寝間着に着替えてベッドに潜りこむ。
「明日から夏休み……。さてさて、何をしようかな……」
私はワクワクしながら、眠りにつく。

2話　バーベキュー

さてさて、今日は高校時代の友人たちとバーベキューへとｔｎｈと呼ばれる浜辺へといく。

現在時刻は8時半、私はベッドから飛び起きて外出用の洋服に着替えた。

外出用の洋服と言ってもそんなにお洒落な物ではない。

ジーパンに無地のＴシャツというコーデだ。

着替えを終えた私は、大学に持っていってるリュックサックを鷲掴みにして、二階へと降りた。

「おはよ」

ご飯を作ってる母にそう言う。

母も料理をしながら「おはよ」と返事をした。

「ご飯残ってるよな？」

そう言いながら、私は炊飯器を開く。

昨日、私がいつもより多めにご飯を炊いたのだ。
「あるよ」
と、母。
私は比較的大きな二段弁当を取り出して、たんまりと残っているお米をシャモジで掬い、それを二段弁当に隙間も残さぬほどにご飯を圧縮して押し込んだ。
「よし……！」
質量の大きな惑星だったら確実にブラックホールが出来上がるぐらいに圧縮されたお米だけの弁当を見た私は、得意気に呟いて弁当入れに入れてリュックサックの一番下に入れた。
あとはハンカチ、スマホ充電のスティック型モバイルバッテリー二つを突っ込む。
更に財布に必要金額１００００円が入っていることを確認して、それをリュックサックに放り込んだ。
そして、スマホから集合時間を確認する。
私がｓ駅前に着かなければいけない時間は１０時。
いまは９時。
電車時刻表のアプリで９時５０分ほどにｓ駅前に到着すれば、何時にどの列車に乗れば良いかをチェックする。

アプリが記した時刻は9時１０分に到着する各駅停車だ。
自宅から地元の駅まではそんなに掛からないが、調子に乗ってゆっくりとしていると、踏切で阻まれて乗り過ごすという失態を犯してしまう。
故に、私はすぐに家を出ることにした。
「そいじゃ、行ってくるわ！」
私は母にそう言って、玄関へと向かう。
母もスマホで動画を見ながら、「はーい、行ってらっしゃい。楽しんでなー！」と言った。
外に出ると、蝉の合唱が出迎えてくれた。
蝉たちで合唱コンクールでも行っているのだろうか。
かなりの蝉が鳴いていた。
私は夏が来たという思いに満たされながら、駅へと向かう。
私は敢えてイヤホンをせずに蝉の合唱を聴くことにした。
蝉の鳴き声は大好きだ。
この蒸し暑さと蝉の鳴き声、夏特有の空気の香り。
これぞ夏の風物詩とも言えるものだ。
そんなことを思いながら5分、駅に着いた。

私は定期券を取り出して、改札を通る。
そして、二番ホームに行って列車が来るのを待つ。
その間に、私はイヤホンを取り出して音楽を聴き始める。
東方の「夏風」というタイトルの曲だ。
ぜひ、みんなも聴いてみてほしい。
青天の朝9時ぐらいにこの曲を聴くと、何とも言えない心地よい気持ちになる。
私はその曲を聴きながら、小説の続きを書き始めた。
「(今日中には完成はしないやろうな。まぁ、取り敢えず適当に描き進めるか)」
そう思いながら、本当に適当に書き始める。
取り敢えず、現章の主人公ポジションの朱雀という闇英雄のキャラクターを動かす。
異世界転移し、更に異世界転生した彼がその異世界で魔王の使途であるトコヨ・マリーを、街の皆と討伐する回だ。
「(どんな感じで書くべきか……。迷うな)」
各駅停車が到着し、それに乗り込んでも筆(指)を止めることはなく、書き綴る。
結局、s駅に到着するまで、小説を書いていたのだが、書けたのはたったの3行だけだった。
「ふぃー……ついた……」

私はスマホをリュックサックの中に突っ込み、駅を出る。
「（あと、7分か）」
私はリュックサックからスマホを取り出して時間を確認する。
取り敢えずラインで『いまどこら？』と打って、近くのスーパーに入った。
店内は冷房が効いており、非常に心地よい空間となっていて、全身にかいていた汗は瞬く間に無くなる。
漬物などの商品を眺めていると、スマホからピロン！と比較的大きめのメロディが流れた。
多分、メンバーからの返答だろうと思った私は即座にスマホを取り出してラインを見た。
やはりと言うべきか、友人からで既に駅前に到着しているようだ。
私は、すぐに店を飛び出してキョロキョロと見渡すと、6、7人乗りのレンタカーの窓から手を降っている青年の姿が見えた。
「おったおった」
私は早歩きで、彼らの元へも向かう。
「はようさん！」
私は運転する天狼淳也に挨拶をする。

彼もおはよう！と挨拶を返した。
「一番後ろに乗ってくれ」
「あいよー」
そう言われ、私は後部座席に座った。
いや、座ったというか、寝転んだ。
今回のバーベキューの人数は５人。
運転する天狼淳茶
企画した囁木笑弥
その他の空本勝也
おなじく尾橋冠来
おなじく楠崎龍照
となっている。
つまり、後部座席は私一人、自由に寛げるという訳だ。
「じゃあ、まずデパート行って、そこから俺の家でバーベキューセット取ってくるから、お願い」
「うーい」
笑弥が淳茶（以降淳ちゃん）に指示を出した。

淳ちゃんは、それを聞いてハンドルを握り、運転を始める。
私は寝転んだままスマホを弄り、小説を再度書き出す。
ここから、デパートまで２０分ほどだろうか、私はそれまで寝転んで小説を描く。
しかし……。
「気分悪い……」
車に乗って5分も経過しないうちに、車酔いにやられてしまう。
空本（以降そっらー）も「大丈夫？」と心配し、冠来は「寝転んでるからじゃない？」とド正論をぶつける。
まぁ、いつもの流れである。
「大丈夫や」
私はそう言いながら、対魔忍ＲＰＧを起動してイベント周回を行う。
それを見たそっらーは茶化し始めた。
「お、対魔忍やってんのか？」
「ええやん、このあいだ暇なんやし」
そう言うと、淳ちゃんと笑弥は吹き出した。
私の対魔忍好きは、我々高校の友人内では知らないやつはいないというレベルで知られている。

まぁ、お陰さまで私のことを対魔忍朱雀とかいう称号みたいなのをつけられている。
車酔いに苛まれる中で、やる対魔忍ＲＰＧは楽しいかと言われれば、別に。
その後は、笑弥の家につくまで友人たちと下らない話で盛り上がった。
笑弥と淳ちゃんはトレクルというゲームの話、そっらーはなにやら調べもの、冠来は将棋のゲーム、私は再び小説書きに戻った。
そうしているうちに、デパートへと到着する。
駐車場は最上階、ここから車はとんでもない坂をグルグル周りながら登ることになる。
私は、周る時に物凄い酔いが襲ってきた。
「うおおおおおおおお!!?」
私は車が周る度に呻き声を上げて、その間抜けな呻き声に友人たち全員が大爆笑。
「はやくううううう!!　めっちゃ気分悪いいいいいいいいいい!!!」
「笑かすなや!!」
大爆笑しながらキレる淳ちゃん。
そっらーは苦痛に歪む顔を眺めながら笑い散らかしていた。
「あー、めっちゃ気分悪い……」
「龍照大丈夫か?」

笑弥が心配そうな顔で肩を貸してくれた。
そんな中、私達はデパートの食品コーナーへと行き、ピザ二枚を購入し車に積めた。
これにより私は寝転ぶことができなくなってしまった……。
「後は、笑弥ん家（ち）やな？」
運転している淳ちゃんが隣で今日のスケジュールを再確認している笑弥に話しかける。
彼はスケジュールを見ながら「そうーやな」と言った。
「りょーかい」
そう言って、ハンドルを握る。
再び気分が悪くなる私。
最早死に損ないの虫である。
「龍照大丈夫か？」
ちょっと半笑いのそっらー。
私は「お前ちょっと笑ってるやろ」と頑張って笑いながらツッコミを入れた。
図星を付かれたからか、普通に笑いをあげる。
冠来は私の身を案じたのか、酔いを治す方法を教えてくれたが、全く意味がなさなかった。

そんな下らないことをしているうちに、笑弥の家に到着する。
笑弥、冠来は家の中からU字溝コンクリートにレンガ2つ、この前のバーベキューに使った炭の残り、釣り道具を持ってきて、車の中に積む。
そして、2人は車に乗り込んで、今度はスーパーに向かった。
30分ぐらいして、スーパーに辿り着く。
酔いの方は耐性を得たのか、はじめほど死にかけるほどではなかった。
全員が鞄を持ち車を出てスーパーに入る。
ここで、2手に分かれることなったのだ。
笑弥と冠来、そっらーは肉系、私と淳ちゃんはその他諸々を担当し、必要なものを買うといった感じである。
笑弥たちは、カートを使って肉が陳列されている食品コーナーへと向かい、私と淳ちゃんはお魚コーナーへと向かった。
「龍照はなに買うの?」
「私はハマチと鯛のお刺身を買うかな」
「おー」
淳ちゃんは感心したような表情と口調でそう言った。
「淳ちゃんなんか欲しいやつある?」

「やー、俺は何でもエエよ」
「そいだら、焼き肉のタレ買いに行くか」
「そうやな」
カートを動かして焼き肉のタレが売られているコーナーへと向かう。
「タレってここら辺に売ってるよな？」
「確かそうやったはずやで」
棚に陳列されてある調味料類を見ながら、焼き肉のタレを探す。
因みにだが、友人とのバーベキューでタレを買うとき絶対に買うタレがある、そのタレは焼き肉のタレ醤油味である。
このタレはヤバイ。
焼き肉のタレの革命と言っても過言ではない。
焼き肉のタレ界隈の重鎮、青天の霹靂である。
話すと凄い長くなるので、取り敢えず、このタレは宇宙ということだ。
「あったあった、これはかかせない！」
「あーそれね！」
淳ちゃんも、このタレの素晴らしさを分かっているようだ。
私は更に塩タレもかごの中に放り込む。

「後は、醤油か」
　ハマチと鯛を購入するので、醤油、ワサビも欲しいと思い、私は醤油とワサビもかごに入れた。
「他、なんか欲しいやつある？」
「網、着火材か？」
「あー、そうやな」
　カートを押して、そのコーナーへと向かう。
　大小様々な網が積まれていた。
「小さい網を二枚やったな」
「うーん、そうやった？」
「この前やったとき、そんな感じじゃなかった？」
「あー覚えてない」
「さいでっか」
　笑いながら言う淳ちゃんに、ハハハと苦笑して小さめの網を二枚かごに入れる。
　更に着火材も数個カゴに放り込んだ。
「どうすー？　一回笑弥たちと合流する？」
「そうやな」

私たちは、笑弥たちがいると思われる肉コーナーに向かった。
しかし、笑弥たちがいたのは、肉コーナーではなくチーズ等が陳列されているコーナーだった。
更に、私たちが近づくと笑弥は呆れ笑いの表情で私に「龍照これみてやぁ」と買い物カゴを見せてきた。
そこには大量の肉の他になぜか食パンとチーズとケチャップが入ってあった。
「なにゆえ、食パン??」
私が笑弥に訊ねると、冠来が物凄い得意気に、しかもかなり真剣な表情で「いやこれまじで必要やねん」と言い出した。
どういうこったよ……。
「んー、パンとチーズとケチャップでピザ的なやつ食べるんか?」
と言うと、冠来は真剣な眼差しで「いやもうホンマにめっちゃうまいねん!」と言った。
こんなくだらないことを真剣な表情で言われても、私はどんな反応をしたら良いのだろうか……。
「まーでも、ええんやない?」
「でも、これ割り勘やで」

笑弥の言葉に私は「おぉい！」と冠来に問い詰める。
冠来はゲラゲラと笑って誤魔化した。
「ちょちょホンマにうまいねんって！　龍照も一回食べたら分かるで！」
「まー、うん。それより肉はどんなの買ったの？」
「鶏肉とか牛肉、タン、ハラミとかやな」
「なーる。あれは買ったの？」
「買ったで！」
笑弥はニヤリとしながら、カゴからあるものを取り出す。
鶏刺しである。
「やっぱ買うよな、でも大丈夫？」
「龍照それ毎回言ってるよな」
私の食中毒の心配事に爆笑する笑弥。
「それなら、と」私は野菜コーナーにて、あるものを3パック持ってカゴに入れた。
それをみた笑弥、そっらー、淳ちゃんは笑いをあげる。
薬味のネギを千切りにしたパックだ。
「これは必要やな。これは、私が出すわ」
「いや、それくらいならええよ」

「そかそか」
　その後、馬肉や釣り餌、アルミ箔、トング、大量の水、お茶、コーラ、紙コップ、紙皿をカートに入れてレジに出る。
　4つの買い物カゴに溢れんばかりの商品、レジ担当の人からしたらとんでもない客が来たと思うだろう……。
「これ、2手に別れた方がエエよな」
「そうやな」
　冠来の提案に笑弥が頷いて、2手に別れて会計をすることになった。
　我々は丁度セルフレジが開いたので、私と淳ちゃんが必死に会計を済ませた。
「これ、全然反応しないけど、どうなってるんや?」
「こうやで」
「お、ありがとう」
　何とか会計を済ませた私達は買い物袋に買った商品を丁寧に積める。
　全て積め終わると同時ぐらいに、笑弥たちも会計を終えたようで、袋に積め始める。
「あり得ないぐらい多いな……」
「そうやな」
「てか、肉多くね?」

「これの半分冠来が欲しいって言ったやつ」
「お前かよ！」
突っ込む私、爆笑する冠来。
そして、金額を合計し、そこから割り勘をした。
一人３０００円だ。
それを笑弥に渡し、買い物袋をカートに置いて、車まで向かう。
「さて、あとはｔｎｈに行くだけやんな？」
「そうやな」
「あいよ」
淳ちゃんはハンドルを握って運転をする。
ｔｎｈまで渋滞がなければ１０分ほどで到着するので、その間に小説を書こうと考え、スマホで小説執筆を始めた。

１５分後……。

「ついたで！」

ｔｎｈ駐車場に到着。
私たちは、浜辺に近い駐車スペースを選び、そこに車を止めた。
ここからだと、バーベキューができる場所まで、２０秒程度で行けるから最高の場所なのだ。
全員で荷物を持って浜辺へと向かい、バーベキューの準備をする。
「そしたら、私は肉焼いてる間に刺身切るわ」
そう言って私は刺身を斬ろうとしたときだった。
フミヤが「あっ！」と声をあげたので、私たちも「どうした?!」と少し心配な表情で駆け寄った。
「ごめん、油とライター忘れた」
「え？」
「あらー」
「持ってきてないの？」
淳ちゃんと冠来は「マジか」といった表情をして、そっらーは申し訳なさそうな表情をした笑弥にきく。
「忘れてた。龍照マッチ買ってきてる？」
「いや、笑弥が持ってきてくれてると思って買ってないな」

「あー……」

「そしたら、私があのスーパーまで走って買ってくるで」

私はそう笑弥に言う。

しかし、彼は「いや、俺が買ってくるわ」と言ったが、何となくマッチを買わなかった私にも問題があると感じ、リュックサックを背負った。

そうすると、笑弥も「ごめん、そしたらお願いするわ」と言う。

「構ん構ん。あ、そしたら私が買った刺身切っててほしい。この感じやと確実に腐るから、先に刺身全部食ってててええで！」

と言って、お供に淳ちゃんを連れてスーパーへとダッシュで向かった。

行く際に、笑弥が「車で行ったら？」と言ったが「駐車料金取られるし、走って行く方が面白い」と言って断った。

２０分後……

「買ってきたで!!」

私と淳ちゃんはライターと油、ドライアイスに挟まれた鯛をもって戻った。

「おー、戻ってきた」

そっらーはスマホでゲームをしながら、私と淳ちゃんの方を見て、そう言った。
笑弥と冠来はどうにかして、火を起こせないかと模索している様子が見て取れた。
「龍照ごめん、ありがとう」
笑弥は凄い申し訳なさそうな表情で、私の方に近づき、私の腕に触れて謝った。
「にゃー、気にすんな」
私は笑弥に言って、ライターと油が入った袋を渡した。
すると、もうひとつの買い物袋に目が止まった笑弥は、「龍照何か買ったん?」と聞いてきたので、私は「ほい、鯛の刺身」と袋を持ち上げて言った。
「また買ったんかよ!」
笑弥の笑う声に冠来やそっらーも笑いながら、私の買った鯛を見る。
「だって、切っててっていった鯛は全部食うたやろ?」
「いや、龍照の分残してるで」
「まじで!?」
「クーラーボックスに入れてるで」
笑弥が指差すクーラーボックスのなかを覗くと、鯛の切り身があった。
「ｏｈ‥‥　鯛買わんでよかったな……」
「まー、ええやん」

淳ちゃんは私を励ました。
励ましているのか分からんけど……。
いろいろと、ハプニングはあったが、何とかバーベキューが始まった。
レンガの上にU字溝コンクリートを置いて、その溝の中に炭と着火材を入れて、網を被せる。
そして、ライターで着火材に火をつけて網の上にさまざまな肉を焼いた。
「焼いてる間に鶏刺し食べようかな」
笑弥はクーラーボックスから鶏刺しを取り出して、塩タレを紙コップに垂らす。
そして、鶏刺しを塩タレにつけてパクリと食べた。
「めっちゃうまい！　龍照も食べや」
「まぁ、ちょっとだけもらうわ」
そう言うと、私は自分のリュックサックの中から、弁当を取り出して蓋を開け、更に紙コップに買ったネギを大量に投入し、醤油タレをかける。
それをみた笑弥は「ちょっと待って」と言いながら超爆笑する。
その笑いに釣られたそっらーと冠来、淳ちゃんも駆け寄って、私の紙コップの中身を見て、笑弥同様に超爆笑した。
「ネギしかないやん！」

「薬味やで」
私は冷静にそう言う。
紙コップの中の割合はネギ9、タレ1の割合でほぼネギで埋めつくされていたのだ。
私は鶏刺しを一枚貰い、大量のネギに包み込み、それを食べる。
それをみた笑弥は「最早どっちがメインで食べてるんか分からんな」と言い笑う。
更に、私の二段ご飯弁当を見て再び笑い転げる。
「ちょっと……」
何か言いたそうだが、笑って言葉がでないようだ。
そっらーに至っては、笑いすぎて噎せている有り様である。
「なに?」
私はキョトンとする。
ネギ鶏刺し一枚に、縦長の弁当箱に入っている半分のお米を箸で無理矢理掴み、それを口に頬張る。
それをみた四人はまたもや吹き出す。
「一口がでかいねん!」
「カバかよ!」
笑弥と冠来が突っ込む。

それはもうＯＮＥ　ＰＩＥＣＥのギャグシーンで浜辺が大爆笑の渦に飲み込まれていた。

私からしたら至って普通なのが……。

因みに鶏刺しは弾力があって凄い美味しかった。

何と言うか、焼き肉のタレ醤油味と鶏刺しの弾力が交ざり合い、このような素晴らしい味になっているのだと思う。

「やっぱ、鶏刺し結構いけるな。後が怖いけど」

「いけるやろ」

心配をよそにムシャムシャと食べる笑弥。

私は、鯛の刺身を醤油とワサビとネギとご飯で全て平らげる。

馬肉やハマチ、鯛で二段弁当はすぐに空っぽになる。

「もうご飯食べたんか！」

「おん」

「龍照早すぎるわ」

そっらーと淳ちゃんは焼き肉を食べながら言う。

私も刺身と馬刺を食べ終えて、焼き上がった肉を適当に取って食べていた。

しかし、その時私はとあることに気づいた。

「おおおぉい!!　焼き肉醤油タレもうないやんけ!!」
「え?　まじで?」
そっらーは興味津々で私の持ってるスッカラカンになった醤油タレを覗く。
「ああ、ほんまや!!」
笑いながら醤油タレを指差すが、私からしたら笑い事ではない。
「おい誰やねん。こんなに醤油タレ使ったやつ!」
「ごめん、結構使ってこぼしたわ」
私は空っぽになった醤油タレ2つを手にもって訴える。
すると、冠来が何も悪びれることなく言う。
「お前かあああああ!!!」
「アハハハハハハ!!!」
私は笑いながら逃走を図る冠来を全力で追いかけた。
笑弥と淳ちゃん、そっらーは、その光景を見ながら焼き肉を食べて大盛り上がり。
因みに、いまは平日ゆえにこの場所は我々以外誰もいない。
つまり、ある程度は暴れ盛り上がれるというわけだ。
3分ぐらい冠来を追いかけ回していると、疲れてきたのか冠来がこちらを振り向き、
「待て待て落ち着こう、ほら肉食べられるで!」と停戦みたいなことをしてくる。

まぁ、私もかなりクタクタになってきたので、停戦することになった。
その後は、焼き肉を食べたあとはピザを食べ、何事もなくバーベキューは進行し、時刻が5時半になり夕日が眩しくなり始めたところ、突如冠来が立ち上がり、車から釣り竿を取り出した。
「あの堤防みたいなところで魚釣りするわ」
「あー、じゃあ俺も行くわ」
と言って、そっらーと冠来は餌と釣竿をもって堤防のような場所に歩いて向かった。
笑弥と淳ちゃんは、冠来が買った（割り勘）肉を焼いて食べていた。
一方、私はお腹がいっぱいで、椅子に座って対魔忍のイベント周回を行っている状況。
6時を周り、辺りが薄暗くなり始めたころ、ふと冠来とそっらーの様子が気になり見に行くことにした。
「笑弥ー」
「ん？　龍照どうした？」
「ちょい、冠来とそっらーの様子見てくるわ」
「んー、わかった」
私はそっらーと冠来のいる堤防へと向かった。

彼らがいる堤防へと辿り着くと、二人はそれぞれ別のポジションで釣りをしていたが、なにやら冠来の様子がおかしかった。
不思議に思った私は早歩きで冠来に行く。
「冠来どうした？」
「あー、龍照。ちょっとこれみてや！」
そう言って釣り竿の釣糸を私に見せつけた。
それを見て、私は少しだけ笑ってしまう。
釣糸が絡まっており、五時半から今までずっと釣糸をほどいていたようだ。
「おいこれどうなってんねん！」
悪態をつきながら、かなり雑にほどく冠来。
淳ちゃんもやってきて、あまりのマヌケ様に私たちは吹き出している。
「これをこうしたらええんやない？」
私も絡まった釣糸をほどこうとするけど、全くほどけない。
「うおぉい！　ほどけねえぞ!!」
どうにもできなくなったのか釣糸をブンブン振り回し始める。
振り回したおかげか、さらに絡まってしまう。
「落ち着け落ち着け！」

「どうすりゃええねん！」
「あはははは!!」
止める私、喚く冠来、笑う淳ちゃん。
奥の方で、こちらの惨劇を高みの見物とばかりにそっらーが笑っていた。
結局、絡まったまま何とか魚釣りをすることになった……のだが……。
「つれそう？」
「全然」
「だよな」
やはり釣糸が絡まっており、上手くできないようで、ハンドルを懸命に回そうとしていた。
私と淳ちゃんもそれを近くで眺めていたが、その時だった。
そのハンドルがポロリと千切れたのだ。
「……」
「……」
「……」
時間が止まった。
「……」

「……」
「……」
２秒ぐらいだろうが、我々からすれば1分ぐらいの感覚である。
そして、冠来が「おおおおおおい!!!」と絶叫。
「アッッッハッハッハッハッハッハッハッハ!!!!」
「ハッハッハッハ!!」
堤防に大爆笑の荒波が押し寄せてくる。
特に私がヤバイ。
「アッハッハッハッハッハッ!!!　アハッアハッアハッアハッハッハッハッハッハッハ!!!!!」
「モオオホッハッハッハハ!!」
私の超笑いに釣られたのか冠来も笑いだす。
「これみろよ!!」
「ハアアアアアアアアハッハッハッハッハッハッハ!!!!!!」
もう腹が雑巾絞りだ。
ツボに完全に嵌まってしまった私は、冠来の千切れたハンドルをみて、死ぬほど笑い転げた。
五分ほど、そのやり取りがあり、結果的にどうなったかと言うと……。

「も、もうやめろおおおおお!!!　腹イタイイイイヒッヒッヒッヒッヒッハハハハハハハハ!!!!」

冠来は釣竿を置いて、大きな毛玉みたいになった釣糸だけをもって、海に垂らした。

そして、淳ちゃんが魚の餌をその場所にバラバラと放り落として魚を釣るという方法である。

「どうなってんねん！　これ!!」

「も、もう冠来、喋るな!!　はら……腹いてえ!」

「見ろよこの釣り方!!!」

「ガアアアアアアアアアアアハッハッハッハッハ!!!!!」

「なんやねんこれ!!」

「やめろおおおおおしゃべるなあああああああ!!!!　腹がああああああ!!!　腹がアアアアアアハッハッハッハッハッハッハッハアアアアアア!!!!!」

真面目にキレた顔で釣糸を持って魚を釣ろうとする冠来を見て、さらに吹き出す私。

流石の淳ちゃんも、この光景には笑いは不可避のようだ。

私も爆笑しながら、餌が入った袋を持って海にちゃぽちゃぽと落とす。

「これも海に落としたらおもろいな」

「さすがにそれは、腹が終わる」

「アハハハハハハ!!!」
ちょっと半笑いの冠来は、フラグを設立した。
想像したら笑けてきた。
しかし、現実はそこまで美味しいフラグは回収されることはなく、笑弥からの「そろそろ焼き肉食べよう!」というラインで、全員がバーベキューの場所に撤収することになった。
時刻は6時半、辺りはすっかり暗くなっていた。
「あー、腹が捩れるところやった……」
「どうしたん?」
笑弥は肉を焼きながら、私に聞く。
私は先ほど起こったことを話すと、笑弥も大爆笑する。
「もうホンマ最悪やで」
「なははは!!」
私も先ほどのことを思い出して、吹き出した。
駄目だ、まじでツボる。
最強過ぎた。
「てか、冠来食えよ肉!」

笑弥は冠来に訴えた。
よくよく考えてみれば、あれだけ冠来は肉を買っていて、そんなに食べていないのだ。
「いや、お腹いっぱいやねん」
「おまふざけんなよ！」
笑いながら、冠来を蹴飛ばす笑弥。
冠来も笑いながら、「あのときは絶対に食べれると思ってん」と弁解をする。
しかし、その大量に冠来が買った肉は割り勘である。
「オメー食べろって！」
私も冠来を取り押さえて、肉を食べさせようとする。
冠来は「いややーお腹いっぱい!!」と笑って抵抗をするので投げ飛ばし、全力で逃げる冠来を追いかけた。
らちがあかないと判断した我々は、仕方がなく、買った肉を焼いて食べ、残った肉はクーラーボックスに入れて、笑弥が持って帰ることになった。
「てか、冠来パンも食べていないやん」
「もうお腹いっぱいや」
腹を抑えて辛そうな表情をする冠来を見て、私は再び冠来を追いかけ回した。
「お前ー！」

「お腹いっぱいいいい!!」
その光景をみた三人は、ゲラゲラと笑い転げていた。
そして、時刻が7時を回ったころ「そろそろ帰る準備するか!」と笑弥が立ち上がる。
時間をみた我々も同意をして片付けの担当を決めた。
話し合いの結果、冠来と笑弥がU字溝コンクリートやレンガの洗浄、私と淳ちゃん、そっらーが周囲に散らかったゴミの掃除に決まった。
「そしたら、やるかー!」
笑弥がそう言って、冠来と共に鎮火させたU字溝コンクリートとレンガを持って洗い場へと向かう。
そして、我々は散らばったゴミなどをトングで掴んで空っぽになった買い物袋に次々と入れ始める。
「えらい散らかってるな」
「ホンマやな」
「だいたい冠来じゃない?」
淳ちゃんの言葉に私とそっらーが言う。
私達は、スマホ機能にある懐中電灯で周囲を照らしながら、散らかした我々のゴミを回収していく。

ゴミは想像していた以上に散らかっており、五分も経たないうちに、三人のゴミ袋はいっぱいになった。
「これ一旦ごみ捨て場に持っていくか」
「そうやな」
「おん」
私はそう言いながら、ごみ捨て場に向かう。
二人も私の後を追ってきた。
ごみ捨て場の近くの洗い場では、二人がU字溝コンクリートを洗っていた。
「あれ凄いキツそうやな」
「そうやな」
私たちは、手にもっているゴミ袋をごみ捨て場のカートに放り込んだ。
何となく予想ついたが、カートの中は大量のゴミでいっぱいだった。
やはり、我々と同じくバーベキューをしたのだろうと予想できるものばかりだ。
「まだゴミがあるか見てみるか」
「やな」
一生懸命に洗っている二人を見つめながら、我々はゴミ拾いに戻った。
やはりというか、我々がバーベキューをした周囲には、まだまだゴミがたくさんあり、

それを袋に詰め込む。
ちょうど周囲のゴミを掃除し終えたところに、笑弥たちも洗い終えたようで、戻ってきた。
「じゃあ、荷物まとめて帰ろうか！」
「うーい」
「せやな」
「あいよー」
「忘れ物ないか？」
みんながそれぞれの荷物、そしてクーラーボックスやレンガ、U字溝コンクリートなどを持って車へと向かった。
現在7時半、我々は楽しいバーベキューを終えて、車で帰路につくことになる。
まず、笑弥の家に向かい、バーベキューに使った物を家に置いた。
笑弥は最後まで全員見送ってから、電車で帰るらしく笑弥も車に乗る。
「なっかなか楽しかったな」
私の言葉に全員が同意する。
少しハプニングもあったけど、このバーベキューは忘れることのない思い出となるだろう。

S駅に到着するまで、車内では本当にくだらない下ネタ話で盛り上がった。
「冠来と竹下があんなことしてたんやろ？」
「するわけないやろ!!」
「竹下……君のケツの穴は、草原を翔け抜けるつむじ風を彷彿とするよ。まぁ、御上手ね！」
私は竹下と冠来、一人二役で演じる。
「お前いらんこと言わんでエエねん!!」
「ギャアアアアアアアアアア!!!」
私のいい加減な下ネタ話に痺れを切らしたのか、冠来は私の脇腹を抉るようにこちょこちょをしてきて、私は絶叫に近い笑いをあげる。
「ごめん!!　ごめんんんんんん!!!　イギャアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」
私の悲鳴に車内はドッと笑いに包まれた。
「あー、あー、あー、あー」
くすぐりを終えた後の私は、涙目で息を切らしていた。
しかし、そんなことでへこたれない私。
「まぁ、これは私は悪くありませんね」
反省ゼロの言葉に、笑弥、そっらー、淳ちゃんが吹き出す。

私はさらに言葉を続ける。
「冠来が悪い。冠来が、竹下の話をしなければこんなことにならなかったわけよ」
「お前まだ言うか!?」
「ぎぇえええええええヘッヘッヘへへへへへへ!!!!!!」
再び始まる脇腹を抉るようなくすぐり攻撃。
私は奇妙な悲鳴を上げる。
そんなことをしていると、s駅に到着してしまう。
「た、龍照ついたで」
「はぁ、はぁ、はぁ……」
「あー、もうくたくたや」
私と冠来は両者クタクタで息を切らしまくっていた。
「じゃあ、私はこれでお別れや」
「おう!」
「龍照ありがとうな!」
「またなー!」
「おつかれー!」
全員が手を振って見送る中、私は手を振りながら、駅内へと入る。

さて、帰るか！

時刻はすでに9時を回っており、人の出入りは少なかった。

「（ふぃー、楽しかったな）」

私は財布から定期券を取り出して、改札を抜けて、ホームで電車が来るのを待つ。

待っている間に、私はＬＩＮＥで母に「いまから帰る」と連絡をして、小説を書き出す。

暫くして、ホーム内に列車が到着するアナウンスが流れ、ベンチに座ってる人々が立ち上がり、黄色の点字タイル付近で待機する。

列車が止まり、扉が開くと人々は一斉に列車に乗り込みだした。

「（またバーベキュー行きたいな。まぁ夏休み下旬で行きそうやな）」

そんなことを思いながら、私は「夏風」をききながら、自分の家へと帰っていった。

続く

3話　遊び

いま私は暇という自然現象に苛まれていた。
大学生故に、小中高校生のように夏休みの宿題もない、因みにバイトもしてない。
それ故に暇なのだ。
それなら卒業論文をすればいいって？
嫌だ。
「……」
私はベッドに寝転びながら、ボーッとスマホをしていたが、あまりにも暇なので春山昂輝にＬＩＮＥで連絡をしてみた。
春山も私と同じ高校の同級生で、長い付き合いだ。
『なぁ、暇や。今日遊べる？』
とＬＩＮＥで連絡する。
連絡し終えると、私は再びベッドに寝転びながら対魔忍ＲＰＧのイベント周回をす

る。

少し経つと、春山からＬＩＮＥで「遊べる」と返事がきた。

私はベッドから飛び起きて、外出用の服に着替える。

上は深緑のＴシャツにジーパンというコーデセンス皆無な服装だ。

更に、リュックサックをチャックを開けて、デュエル・マスターズと呼ばれたカードゲームのデッキを２つ中に入れる。

時計を確認すると、時間は１２時ちょうどなので、昼飯を食べて行こうと考えた。

いま、家族は仕事やバイトでいないので、私は冷蔵庫から納豆とワカメを取り出して１つの茶碗にぶっ込む。

そして、大盛りのご飯と一緒にかけ込んだ。

腹ごしらえが終わった私は、早速自転車に乗って

向かう。

春山の家はかなり遠く電車で行けば良いのだが、バイトをしていないので、金欠気味な私は電車賃節約のために自転車で行っているのだ。

もちろん、電車よりも自転車で行く方が、色々な景色がみれて大好きだからというのもある。

無論、大抵の人は「凄いな……」と呆れ驚いていた。

多分、これは私にしか分からないことなのだろう。
音楽を聴きながら、あえて自転車で行く楽しみが。
よし！
デッキよし！
財布よし！
スマホよし！
家の鍵よし！
イヤホン装着よし！
音楽、「次発　ワタシ３７号」よし！
私は自転車をこいで春山の家へと進む。
相変わらず蝉の合唱が私の出発を迎えてくれた。
今日も素晴らしい快晴だ。
青い空に白い雲、蝉の合唱に暑い空気。
これこそザ・夏というものだ。
心の中でそんなことを考えながら、事故らない程度のスピードで春山の家へと自転車で大地を駆けた。
なるべく車が通る道路を避けて、一通りの少ない道を行く。

次発　ワタシ３７号を小声で歌いながら、頭の中で小説の妄想を働かせて住宅街へと入った。

「ここから何処へ行くの、行き先も分からないまま……」

涼しげな風が吹く中で、私は少しスピードを緩めて自転車をこぐ。

平日の正午だけあって車の通りがなく、私は道路の中央を堂々と行く。

真ん中を進むことで、左右のどちらから子供が飛び出しても、対処できるからだ。

しかし、もしものことがあるため、私はさらにスピードを落として走行する。

音楽は「次発　ワタシ３７号」から「夏風」「ヒトリシズカ」「童遊」へと変わっていく。

春山の家へと遊びに行くときは、基本的に東方の曲を聴いている。

なぜかは分からない。

多分、春山が東方好きだからだろうか?

住宅街を抜けると田畑だらけの道を通る。

多分、山の神様がいまいらっしゃるのかな?と民俗学専攻している私の頭の中で思いながら、さらに進む。

曲は「蛙石」になった。

私の大好きな曲だ。

まぁ、東方の曲はだいたい私に刺さる物が多いので、そんなことを言っていたらキリがない。
そして、また住宅街に入る。
これまで1時間は経過しただろう。
真夏の昼なだけあって、汗の量も尋常ではない。
通り雨でも降ったのかってレベルにびしょびしょなのだ。
１０分ぐらい自転車を進ませると、少しだけ大きな駅が見えてくる。
このまま、私は春山の家には行かずに、とある場所へと向かう。
駅の近くにあるドーナツ屋だ。
店内に入り、トレイにドーナツを２０個ほど置いてレジに向かう。
合計は２５００円ほど、妹から貰った長財布を取り出して３０００円を出した。
ドーナツを買い終えた私は片手にドーナツが入った袋を持って片手運転を始める。
もちろん、安全運転でだ。
わたしは駅を通りすぎて、再び住宅街へと入る。
そこから五分も経たないうちに春山の家に到着した。
一軒家の少し大きな家だ。
私は自転車から降りて、インターホンを押した。

『はい』
「楠崎です」
『はい』
春山の声だ。
少しの間を置いて、春山が出てきた。
褐色肌で顔立ちも普通に整っていて、一般の好青年という印象を受ける。
性格もかなり物静かだ。
「ういーす」
「おう」
私と春山はそう挨拶して、私は彼にいつもの所に停めていいか?というと春山は「うん、そこでいいよ」と言ったので、私はガレージに自転車を停める。
「ふー、つかれたー」
「お疲れ、いつも凄いな」
「まー、自転車で来るのも悪くはない」
「そか」
「それより、行きしなにドーナツ買うてきたで」
「おー、わざわざありがとう!」

いつも通りの会話である。
6、7年から変わっていない。
「ちょっと手洗いするから、洗面器貸してほしい」
「うん、いいよ」
「すまんな。お邪魔します」
私は靴を脱いで、春山の家にお邪魔した。
そして、洗面所で手を洗い、そのまま春山の部屋へと上がる。
春山の部屋に入ると、とりあえずリュックサックを置いて一息つく。
「ドーナツとお茶持ってくる」
「助かる」
春山はそう言ってお茶を取りにキッチンへと降りていった。
私はスマホを取り出して、適当に宛もなくサーフィンをする。
サーフィンをすること3分、春山が戻ってきて、テーブルにお茶と皿、そしてドーナツが入った入れ物を置いた。
「おー、うまそー!!」
そう言って、私は好きなドーナツをサバーラップに包んで、パクリとドーナツの半分を口に含んだ。

「穴まで美味しいドーナツ」
私はそう言いながら、２口でぺろりと食べた。
春山がまだ1つ目のドーナツを食べているのをよそに、２つ目にありつく私。
１０秒ほどで2つ目のドーナツを平らげる。
そして3つ目。
春山が1つ目を食べ終えた時には、私は3つ目を食べきったところだ。
「ふー、食べた食べた」
「早いな」
「まーな」
「俺さっき昼飯食べたばっかりやからお腹いっぱいやとしても早い」
「なはは」
春山の静かに驚いた言葉に、私は笑いながらリュックサックからデッキが入ったケースを取り出す。
そして、デッキの中身を確認しながら、春山にこういった。
「とりあえず、一回やってみる?」
と。
私の性格上、デュエルする時に限らず友人たちと何かする時、私はそれをしたいこと

を仄めかせて、相手から言わせるということを取るのだが、春山の場合はそれが全く効かない……。

というか、私と少しだけ似ているところがある。

というわけで、春山といるときは、私のほうからグイグイと行くことにしている。

「いいよ」

春山はそう言って、ドーナツが入ってる箱や皿などをパソコンが置かれている勉強机に置いて、ベッドにある引き出しからデッキを取り出した。

私もデッキをシャッフルしてテーブルにおく。

春山と行うカードゲームはデュエル・マスターズで、私の使用するデッキは、卍デ・スザーク卍デッキで、春山の方は偽りのＧＯＤデッキだ。

相性的にはこちらのほうが上なのだが、私にはカードゲームにて致命的な力を持っている。

それは……。

「じゃあ、ＧＯＤでアタック」

「負けた……」

圧倒的に引き運がないことである。

私のバトルゾーンにはクリーチャーが1体もなく、手札にはそれぞれイラスト違う卍デ・スザーク卍が3枚、同じくイラストの違う卍月ガ・リューザーク卍が2枚という恐ろしい有り様である。

これがポーカーならどれだけよかったことか……。

因みに、私の引き運の悪さの質の悪いところは、一人でデッキを回しているときは、大会で優勝を勝ち取れるほどの最高の引きを見せて、いざ対人とやって見ると、恐ろしく引きが悪くなるところだ。

「みろよ……この手札……」

「わー」

笑いながら、私のフルハウスの手札を見る。

笑えねえ……。

私は墓地やマナゾーン、手札のカードをデッキに戻してシャッフルする。

「もう一戦！」

「いいよ」

再び始まるバトル。

私はデッキから5枚手札を見る。

絶望した。
私の目の前には卍デ・スザーク卍と描かれたカードが4枚きているではないか。
ひどくねーか？
因みに残りの1枚は堕魔ヴォーミラ。
次のドローがザンバリーならワンちゃんある。
そう思いながら、私は後攻を選ぶ。
「じゃあ、エンドで」
頼む。
ザンバリー、それかドゥリンリこい。
そう願いながらドローする。
「……」
私はデ・スザークをマナゾーンに置いてターンを終えた。
それはこのデュエルの勝敗が決したということでもある。
私が引いたカードはガ・リューザーク。
引き運の無さでは勝ってる。
もちろん、この試合は私の完全敗北に終わった。

「ダーメだ。今回は運が無さすぎる」
そう言って、私はテーブルに屈っ伏した。
どうも私のデッキ達（デュエマ、ポケカ、遊戯王）は勝負に弱いようで、引き運が酷い。
いや、確かに私のプレイングスキル能力の低さもあるのだが……。
しかし……。
どうしたもんなのかねー。
そう思いつつ、私はデ・スザークデッキを一枚一枚確認する。
春山も、私の引き運の悪さにいたたまれなくなったのか、何かと励ましてくれる。
春山は優しい青年だ。
「まぁ、コイツ（デ・スザークデッキ）も久しぶりの勝負に緊張してたんやろ」
「犬は飼い主に似る的な？」
「そうそう、デッキたちは、所有者の性格に似るんじゃないかな？　それじゃないと、この引きはおかしい」
そう言いながら、再びドーナツをパクリと食べる私。
春山は一瞬、チラッと私の方を見て視線をＧＯＤのほうに戻した。
「またやろう！」

「うん」
私は再びデ・スザークデッキで勝負する。
デュエマでは私のデッキはデ・スザークしかないので仕方がないのである。
春山は緑単グランセクトというデッキでいくようだ。
私は今度こそと全力で迎え撃つことにした。
手札は絶妙に微妙という言葉が正しいだろう。
本当にいまいち。
まぁ、動けなくはないんだよなぁぁ……。
そうして、再び始まった三回戦。
こちらは何とか墓地ゾーンにカードを溜めてるが、下地となる魔導具はあるのに、肝心のデスザークやガリューザークがこない。
なんなら、堕魔系の攻撃により、春山のシールドを0にしている。
このまま、次のターンで攻撃をすれば勝てる。
私はそう思った。
しかし、突然春山が出したバードリアントと呼ばれたクリーチャーによって、なんか分からないがやたらと攻撃力の高いクリーチャーが出てきた。
「なんじゃそりゃ」

「じゃあ、シールドブレイク」
「やばい……」
次々と破壊されていくシールド、残り1枚になってしまう。
「じゃあ、ブレイク」
私の残り一枚のシールドがブレイクされてしまった。
しかし、その手札に加えたシールドを見て、私は勝鬨の金を鳴らした。
「シールドトリガー卍獄殺!!!」
フィールドに叩きつけたカードを見て、あの物静かな春山は結構な声で驚愕する。
「ええ?!!」
「墓地にはカードが13枚!!」
「やばい!!」
卍獄殺の効果は、相手のバトルゾーンのクリーチャーを全て破壊する効果。
よって、春山のバトルゾーンにあるクリーチャーが全滅。
さらに春山のターン終了時に墓地から6枚の魔導具クリーチャーを下地に墓地から先ほど、墓地に行った卍獄殺のもう1つの名前である卍月ガ・リューザークをバトルゾーンに出す。
春山のシールドは0。

「俺のターン!!」
　デッキを引いて、すぐにバトルを行う。
「いけええ!!　ガリューザーク!!」
「ま、負けた」
「っしゃおらあああああ!!!」
　勝利を掴んだ私は、ガッツポーズをして勝鬨の雄叫びをあげた。
「アニメと似たような負け方したわ」
　春山は静かに笑いながらそう言った。
「そうなんや」
　私は興味深く春山にきく。
　そこからは、ドーナツを食べながら雑談タイムに入る。
　デュエマのアニメや東方の話、小説の話等々。
　そして、時間はあっという間に、六時になる。
「なかなか面白いよな」
「そうやな」
「そういえば、小説もうじきできるかも」
「そうなんや」

「おん、主人公の朱雀がデスザーク出して色々とする感じやな」
「楽しみや」
「トコヨ・マリーはもうじき討伐されて、メタデフォース抜ける感じになるかも？」
「あの少女も気になるしな」
「せやな。あ、もうこんな時間か」
「ん？　そろそろ帰る？」
「ああ。残ってるドーナツはご家族と食べてくれ」
「ありがとう」
　私は荷物をまとめて、春山の家から出ていく。
　一階に降りたとき、春山の母が迎えてくれた。
「またいらっしゃいね!!」
「あ、はい。お邪魔しました！」
　私は笑顔でそう言って、靴を履いて家を出る。
　春山もガレージまでついてきてくれた。
「そしたら、また小説送るわ」
「おう！」
「じゃあ、バイバイ！」

そう言って自転車をこいだ。
外は夕焼けで青や橙色をしており、非常に幻想且つ神秘的であった。
私は事故らない程度に、神秘的な空を眺めながら、家へと帰宅する。
私はイヤホンを耳に当てて、ハウスリミックスの曲を聴きながら、自転車をこぐ。
３０分ほどで自宅にたどり着き、私は直ぐに風呂へと入った。
次は何しようかと考えながら、シャワーを浴びる。

続く

4話　散歩という名の旅

「……」
朝の6時……。
さてさて暇だ。
手付かずの卒業論文でもやろうか……。
いや、気が乗らない。
あーでも、ほんの少しだけやるかなぁ……。
後々、切羽詰まった時に、進行度が1と10じゃ訳が違うしね。
今のうちに少しでもやっておこう……。
「っしょっと」
私はベッドに乗ってパソコンを起動した。
デスクトップ画面には、無駄に整頓されたファイルが並べられている。
その中の「卒業論文」と書かれたファイルを開き、ワードを起動した。

山の神信仰と書かれた画面が目に映る。
「目次から一切進んでねえ……。夏休みまで何やってたんだよ……私……」
2ページしか存在しない卒業論文を見て、意気消沈する。
否、元々意気なんて無かった。
この場合、無気消沈と言うべきか。
「やるかぁ……」
私はため息を1回ついて、キーボードに触れる。
最低でも6万字は書かなければならないのだから、ため息の1つや2つは出るだろう……。
「えーと、まずは初めの文として……何故、自分が山の神を選んだか……」
私は少しだけ頭を捻り、キーボードを打つ。
ワードには、”この大学で初めて調べたのが、山の神だったから”と書かれた。
「まぁ、これだよな」
下手に小難しい事を書くよりも、こんな感じの方が1番良いだろう。
ただ、少しでも文字数を稼ぎたいと考えた私は、あの手この手を使い、字数を確保した。
「えーと、神という高次元の存在でありながら、美しい女性に嫉妬してしまう人間臭さに

感銘を受けて……こんなもんか」
キーボードを打ち終えた私は、一息ついてベッドに寝転がる。
時計を見ると、8時になっていた。
「2時間も格闘してたんか……」
私は、2時間もかけて出来たのが、初めの文だけなのか……と呆れ果てた。
だが、呆れ果てても仕方ない。
やるしかないのだ。
「第一章は動物態の山の神……と」
私は大学の図書館から借りてきた山の神関連の本を取り出して、動物態の山の神について書かれたページを見る。
「さて……この部分を引用して……その後に自分の考えを書いて……」
私は手に持っている山の神の本を見て、独り言を漏らしながらキーボードを打つ。
「一章の動物態の山の神は、こんなもんでええやろ……」
バタリと私はベッドに寝転んだ。
とりあえず、一章だけで8000字……。
6万字までは程遠いものだ……。
私は少し絶望しつつ、スマホの時計を確認した。

時刻は１２時ジャスト。
今日は友人の家にでも行こうかな。
そう思った時だ。
～～～～～～♪
突如、スマホが鳴り出した。
この音は電話着信の音だ。
私は直ぐにスマホを持って、画面を見た。
スマホの着信画面には「そっらー」と表示されていた。
空本。
私の友人だ。
何かあったのかと思い、私は直ぐに受話器のボタンを押した。
「そっらー？」
「はい、もしもし？」
私がそう言うと、スマホから空本の声が聴こえてくる。
『もしもし龍照か？』
「おん。どした？」

私がそう訊くと、彼は『今日暇か？』と一言。
遊びのお誘いだろうか？
私は「おん、暇やで」と返す。
すると、そっらーは少しだけ高揚しているような口調で『そしたら、ｂｍまで散歩しない？』と言った。
私は大歓迎だった。
ｂｍは私の大好きな場所だ。
私は元気よく承諾し、直ぐにｂｍ駅まで向かった。

１２時３０分
「～～～♪」
私はスマートフォンでｊａｚｚを聴きながらｂｍ駅前で、そっらーの到着を待っていた。
電話では４０分には到着すると言っていたから、もう少しだろう。
その間に何をしようかな。
私はｂｍに売店を見つけて、商品を眺めた。

サーモンや鯛などの握り寿司のサンプルがショーケースの中にあった。
「(美味そうだな……)」
財布を確認すると５０００円札１枚、１０００円札２枚が確認できる。
「いかがですか?」
私が財布を確認した為、購買意欲があると思ったのだろう。
店員が笑顔で私に話しかけてくる。
正直、かなり買いたいという欲があったが、今から友人と散歩をする予定だ。
故に店員さんには「今から友人と散歩する予定ですので、帰りに買いに来ます」と言ってお辞儀をして、売店をあとにした。
「美味そうだなぁ……帰りまで残ってるといいけど……」
私は心の声を口から漏らしつつ、椅子に座ってそっらーが来るのを待った。
「うぃーす!」
「おー来たか!」
１３分後、そっらーが手提げカバンを持ってやってきた。
私は少しだけ気になっている事をそっらーに訊ねた。
「珍しいな。ソッラーから散歩の誘いをするなんて」
私から散歩の誘いをすることはあるが、ソッラーはあまりなかった。

「おん。学門神社に用があって、場所を教えてもらおうと思った」
「なーるほど」
そゆことかと首を縦に振った。
しかし、私はある事に気づいた。
それをソッラーに報告する。
「ここから学門神社って結構遠いで」
「まぁ、歩くのも面白そうやん」
「まー、そうやな」
言われた通りだ。
電車で目的地付近の駅に行くのも良いが、最寄りの駅より2、3駅離れた場所から歩くのも悪くは無い。
歩きながら素晴らしくも美しい景色を眺めるのも一興だ。
「そんじゃあ、行くか」
「案内よろしく」
「あいよ」
私たちはｂｍ駅から学門神社まで、およそ５ｋｍの距離を歩くことになった。
いいねー！

山の麓にある田舎町を歩く。
最高だ。
セミの合唱も聴こえ、夏の香りが私の鼻を燻る。
「あぁ、これだよ……この香りだよ。この夏の香りがいいんだよ」
駅を出た私たち。
夏と山の麓の香りに私は恍惚とした表情を浮かべる。
その私の様子に、ソッラーは半笑いになって「ヤク中みたいな顔なってるで」と言った。
「んなははははは!」
ソッラーの言葉が絶妙に面白く、駅前で爆笑してしまった。
「はぁ、はぁ、はぁ……すまん。そろそろ行くか」
行き交う人々の視線すらも気にもとめず一頻り爆笑した私は、息を切らしながらソッラーに謝って歩き出した。
「そういや、学門神社行くっていう話やけど、弟さんの受験の合格祈願か?」
巨大な鉄橋を歩きながら、私は顔をソッラーの方を見ながら話しかけた。
「そうやな。今必死に受験勉強してるで」
「なーる。まぁ受験勉強は大変やからなー」

「ちょっとでも精神面で楽になれればなと」
「なるほどな。それなら私の禁忌なマジナイやってみるか？」
「禁忌のマジナイ？」
　私の提案に、彼は訝しんだ表情でこちらを見る。
　私はニヤっと笑みをこぼして話をする。
「まぁ……お守りを介した肩代わりやなー」
　私の話にソッラーは眉を顰める。
「肩代わり？なにそれ？」と。
　話を続けた。
「民俗学で習ったマジナイの応用なんやけど、お守りを買うやろ？　そんで数時間自分が持ち続けて願いを込めるねん」
「うん」
「確か、大学……2回生の時やったかな？　あの時、私の妹が高校受験、友人が大学受験を控えててな。友人に至っては二浪してた」
「おー……」
「で、私は大学をサボって学門神社まで向かったのな。今から向かうルートと同じ道をな」

そんな話をしながら鉄橋を越えた私たちは、住宅街へと入った。
そこは古い民家と新しい家が立ち並ぶ場所だ。
こういう新と旧が混じり合うのは結構好き。
「で、学門神社で2人の合格を祈り、お守りを購入したのよ」
「ほうほう」
「で、私はそのお守りに願いを込めたのよ」
「なんて込めたの？」
「……妹と友人の苦しみ、痛み、ストレス、全てを私が請け負いますので、2人が絶好調の状態で受験に挑み、無事合格出来ますように。と」
「……なるほど」
私の願いに、彼はコクコクと頷く動作をしていた。
「それで私はそれをしまって同じ道を何時間もかけて帰った。なんなら、帰る時はｂｍからじゃなくて、もっと遠い駅までな」
「ん？なんで？」
「お守りに私の魂を宿らせたのよ。その私の魂が2人に降りかかる厄災を身代わりになるように」
「……それで……？」

「帰りは6時間は歩いたよ。お守りに私の魂が入るように、2人の合格を祈りながら」
「龍照凄いな」
私の話にソッラーは感服の眼差しを送っていた。
ただ、私には当たり前の事をしてるので、「そうか?」と答えた。
「他人にそこまで出来んぞ普通は」
「そんなもんなのかなー」
「それで、その後はどうなったん?」
暑さも忘れ、ただ私の言葉を聞くソッラー。
線路伝いの住宅街を歩く私たち。
単線の線路は電車は来ずに、聴こえるのはセミの合唱だけだ。
「それで、それを妹と友人に渡した。2人は喜んでいたな。まさか反抗期まっしぐらの妹があーも喜ぶとは、驚いたで」
私は少しだけ微笑む。
ソッラーも私の微笑みに、ニヤっとした。
「で、その2日後、妹はインフルエンザにかかった」
「おいおい」
予想外の言葉にソッラーは苦笑いする。

だが、それを無視して続けた。
「でもな、不思議なことにそのインフルエンザは1日で完治した。それどころか、妹自身もそんなに辛くなかったらしい」
「ｏｈ……」
「後から聞いた話やと、友人はいつもより怖いくらい調子が良く、ストレスも感じる事無く勉強に励めたらしい」
「マジか」
「で、私は、と言うとな」
「何かあったの？」
ソッラーの問いに私は少しだけ笑って頷く。
「胃腸炎で倒れた」
「本当に？」
「マジ。嘔吐、消化不良、腹痛、発熱、全身の筋肉痛で3日間死にかけていたよ。その時、モンハンワールドの発売から2日目だったから最悪だった。寝ても1時間に1回は起きる程に。なんなら1週間は消化不良で大変だった」
「ｏｈ……」
少し、いや、結構引いているソッラー。

住宅街から出て道路に出て歩道を歩く私達。
辺りは田畑しかなく、田舎町にある車道といったところだ。
私は話を続ける。
「で、2人とも試験は合格したよ」
「おおおおおお！」
私の言葉にソッラーは歓声を上げた。
その声は田畑で作業していた夫婦を振り向貸せるには十分過ぎる。
「どう思う？　これが偶然か？　私は思えん。私の体調は万全やった。ストレスもなく普通に過ごしていて、突然の胃腸炎。私は偶然とは思えない」
「おー、確かに。それで2人は無事卒業出来たのかい？」
「……友人は2回生で退学した」
「おはははははは!!!」
私のオチにソッラーの笑い声が田舎町に木霊する。
「まぁ妹は卒業したからな。良しとしてるよ。その人の人生や。死以外の事は兎や角言うのはアレやからな」
「確かにそうやけどな」
「で、これが私のお守りのマジナイ。どうする？やる？」

私はソッラーの顔を見て訊いた。
その様子は、「力が欲しいか？」のソレである。
私の提案に、ソッラーは「うーーーーん」と唸るように首を傾げて思考する。
だが、それを邪魔する産物が道端に落ちていた。
「ん？」
私は何か本らしき物が落ちているのに気づいた。
ソッラーも気づいたようで、その場所まで走り出す。
「っ!?」
「ちょっ！」
落ちている本を見た私とソッラーは、思わず吹き出してしまった。
なんでこんなモンが落ちてんだよ!?
馬鹿じゃねーの!?
「なんでエロ本が、んな場所に落ちてんねん!?」
私は笑いのこもったツッコミを落ちていたエロ本にぶつけた。
雨に晒されたのだろう、カピカピになったエロ本を手に取った。
パラパラとページを捲り、私とソッラーは爆笑し合った。
「マジのエロ本やないか」

「ホンマやなぁ」
エロ本で爆笑する大人２人。
ただ、真昼間な為、思考がまともの２人は「何故こんな歩道のど真ん中にエロ本を捨てたのだ?」という疑問が浮かび上がった。
しかし、いくら考えてもその答えは浮かばず……。
その結果。
「とりあえず、元に戻しておこう」
「やな」
私達は元の場所（歩道）に戻した。
「絶妙にモヤモヤする疑問が残ったなぁ」
「そうやなぁ……」
頭の上にグチャグチャした毛玉のような物を浮かばせて、路地へと足を踏み入れた。
「そういえば、この路地を行った所に小さな店あったな」
「お、行ってみるか」
「おん!」
少しの時間、歩いていると私の言った店にたどり着いた。
戸を開けると、そこには野菜や駄菓子、洋菓子等が陳列されたＴｈｅ・昔ながらの老

舗といった店だ。
中に入ると、白い髭を生やした元気なお爺さんが笑顔で迎え入れてくれた。
「いらっしゃい。ゆっくり見てくださいな」
少しだけ枯れた声で言うおじいさん。
私も笑顔でお辞儀をして「ありがとうございます」と返し、陳列された駄菓子をマジマジと物色する。
「ソッラーなんか良いのあった？」
私は駄菓子を物色しながらソッラーに話しかける。
ソッラーは野菜のコーナーを見て、何か購入しようとしていた。
「色々とあるなー……って、これ見てみ」
「んー？　どした？　……おふっ！」
ソッラーに言われ、振り返った私の視線に写った物を見た私は、不覚にも吹き出してしまった。
彼の持つ手には大根があった。
これだけでは普通の光景なのだが、その大根に問題があるのだ。
「何この大根!?」
「凄いやろ？」

その大根はマタコン……いわゆる奇形大根と言うやつだ。
二本足のように先端が枝分かれし、更にその分かれた真ん中に、まぁまぁご立派な1本の伸びた根があった。
最早……いや、やめておこう。
エロ本からのこの奇形大根の流れはまさに奇跡というものだ。
こんな奇跡は非常に複雑であるが……。
「凄いな。私よりデカイんじゃない？」
「んはははははははは！」
私とソッラーは、クッソしょーもないアホな話をしていると、その笑いに釣られたお爺さんも「これ凄いやろ？」と自慢気に話に入ってきた。
私とソッラーもお爺さんの言葉に同意する。
これはヤバイな。
奇跡の代物だわ。
「これ欲しいです」
イチモツ大根をエラく気に入ったソッラーは、それを購入、私は１０円ガムやガブリチュウなどを購入した。
「そんじゃあ、行くか」

「おー、そうやな」
「ありがとう、また来てね！」
満面な笑顔で手を振るお爺さん。
私とソッラーも笑顔で「もちろん！」と手を振り返した。
「そしたら学門神社に向かうか」
「おう」
老舗で休憩した私たちは、当初の目的地である学門神社へと足を進ませた。
３０分ぐらいだろうか。
それなりの時間歩き、やっと学門神社へとたどり着いた。
以前に来た時と大して変わらない中規模の神社だ。
私たちは端っこを歩いて拝殿へと向かう。
「それじゃあ、参拝してくる」
「あいよ。私はここの売店で何か見てるわ」
「りょー」
そう言って、ソッラーは１人で参拝しに向かった。
私は売店に売っている合格祈願のお守りや、勾玉を見つめていた。
「お待たせー」

「うぃーす」
「んー？　合格祈願のお守りか。何か買おうかな」
ソッラーはお守りセットを手に取って、それを購入した。
中にはお守りの他に、塩や勾玉が入っている。
「ええやん。そんじゃあ帰る？」
「おー！」
「どうする？ｂｍ駅まで戻る？　それかａｋ駅まで行く？」
私はそう訊ねると、ソッラーは少し考える素振りを見せてから口を開いた。
「龍照の禁断のマジナイやってみようかな」
と。
そうして、私とソッラーは元きた道を戻り、ｂｍ駅へと歩みを進めた。

後日、笑弥達のグループＬＩＮＥでソッラーが一言。
急性胃腸炎になった。
と連絡が入った。

このマジナイ、マジでヤバイな……。

続く

5話　卒業論文討滅戦

5話　卒業論文討滅戦

「……」

ソッラーとの散歩から数日。

夏の朝、ミンミンと泣き喚く蝉の鳴き声に耳を傾けながら、眠りから覚めた。

夏の香り漂う空気が私の鼻をくすぐり、ベッドから起き上がった。

「眠い……」

私は目を擦りながらも、急性胃腸炎で倒れているソッラーの事が心配になり、スマホのＬＩＮＥを確認することにした。

ＬＩＮＥを確認すると、１件の新しいメッセージが届いていた。

「んあ？　大原か」

そのメッセージは私の大学時代の友人、大原からのものだった。

彼は褐色肌で、如何にもスポーツマンの風貌をしているが、中身は我々と同じように

ゲームや読書を愛好する男だ。
楠崎：どした？
私は、こうＬＩＮＥをする。
すると、少ししてから彼からＬＩＮＥが来た。
そして、その文を見た私は戦慄する。
大原：夏休み明けの卒業論文の発表大変やよなぁ。
「……⁇」
私は眼をパチパチと瞬きをして、再びＬＩＮＥを確認する。
楠崎：ちょっと待てぃ、発表ってなに⁉
大原：んー？　夏休み前のゼミで言ってたやろ？
楠崎：覚えてねえ!!　何それ⁉
大原：お前そういえば寝てたのぉー。夏休み明け初日のゼミで発表があるみたいよ？
楠崎：まじか⁉　寝てた……というかエイプリルフールは終わってるで⁉
大原：にゃー、それを俺に言われてもなぁ。
楠崎：でも、発表って……
大原：もちろん全員な。
楠崎：え、まぁ……だよな……。

大原：おぉー、じゃあ、頑張れよー。
楠崎：あぁー、じゃあ、まぁ、うん、頑張るよ。

私はこのやり取りから5分は、同じＬＩＮＥを眺めていただろう。
セミの心地いい鳴き声が、私の部屋全体を夏色に染めていく。
だが私の心の中は秋を超えて冬になっている。
あまりにも想定外の内容を前に、頭が理解を拒んでいた。
「……やるか……」
しかし、ただただこの場で放心していても何も始まらない。
私はパソコンの電源を入れて、卒業論文を書くことにした。
暇が無くなると思えばいいか……。
「面倒くせぇ……」
私は呟きながら、卒業論文のフォルダをクリック。
前回から一切手をつけていない卒業論文……。
この時点で私のやる気はマイナスを超えた。
パソコンの電源を消して、散歩（旅）にでも出ようかと考えた時、とある匂いが私の鼻を燻った。

「……？　なんか雨の香りがするな」
窓を開けて空を確認すると、視界に入る奥の場所が曇り空に覆われていた。
「うわ……雨やん……」
私は散歩を断念し、大人しく卒業論文を作る事を決めた。
本当に気乗りしないが、致し方ない……。
やるか……。
「えーと、どこまで進めたっけな？」
私はマウスホイールを使って、論文の最後尾までスクロールする。
どうやら一章である”動物態の山の神”を終えたところのようだ。
「えーと、次は……女神様の山の神にでもするか……」
私はベッドから降りて、部屋の隅に置かれてある棚から1つの分厚いファイルを取り出した。
そして、その中から数十枚のレジュメを引っ張り出す。
この4年で培った女神様の山の神の情報が入っている。
サボらず調べておいてよかった。
過去の私よ、ありがとう！

「よし、これを丸写しするか……！」
時計を見る。
時刻は9時３０分。
昼までには女神信仰について書き終えたいところだ。
「えーと、第二章……女神信仰の山の神っと」
私はキーボードをカタカタと鳴らして、文字を打ち始めた。
しかし、そこで新たなる障害物が私を襲いかかる。
「……腹減った……」
突如、私の腹の中に潜む虫がなり始めたのだ。
この虫は腹に食べ物が無くなると、所構わず泣き出して飯を催促するとんでもなく厄介な虫である。
おかげで高校のテスト中に大恥をかいた……。
挙句の果てにそのテストはろくでもない点数。
泣きっ面に蜂である。
「あぁ……飯……」
私は即座にベッドから飛び出して、２階へと降りた。
家族は仕事ｏｒバイトで居ない。

「なんか、飯あるかな？」
私は冷蔵庫を開けて、泥棒がタンスを漁るように中を物色する。
だが残念な事に、中にあっためぼしい物は納豆と卵ぐらいだ。
「なんも無いな……」
私は納豆と卵、野菜室からワカメを取り出して簡単ご飯を作ることにした。
まず汁椀に納豆を入れ、そこにワカメ（水でつけた）を入れて掻き混ぜる。
完成。
卵は目玉焼き（半熟）にして完成。
これで今日の朝食が出来上がった。
私は、いただきますをしてからそれらを口に放り込んだ。
５分ほどで食べ終わった私は食器を台所へと持っていき、卒業論文の続きをする為に自室へと戻った。
「さぁ、やるか」
時計を見ると、１０時丁度。
まだまだ大丈夫。
私はキーボードを使って、卒業論文の執筆を再開した。
しかし、初めは順調だった勢いも時間が経過するに連れて徐々に衰えていく。

それに連なるようにキリッとした表情も、段々もやつれたように酷く醜い顔へと化していった。

「……今何時……？」

私は時計を見た。

まだ１０時５分しか経っていない。

文字数も先程から１００文字しか進んでいなかった。

「この状態で卒業論文に挑むのは難しいな」

独り言を呟いた私は、背伸びをしてスマホでＹｏｕＴｕｂｅを閲覧し始めた。

まぁ、３０分だけの休憩だ。

特に問題はない。

「モンハンのやつでも見るか」

そうして、私はスマホで動画を見て、休憩タイムに入った。

「お、この関連動画いいな」

色々な動画を見ている私は、ふと時計を確認した。

「!?」

高速で２度見する。

私の目に映る時計は３時半と針が記していた。

「……???……???……??……?……?……??」

私は恐怖と疑問、焦りといった感情が一気に溢れ出て、意味不明な表情を浮かべて時計と窓、スリープ状態に入っているパソコンを何度も見た。

無論、私の頭には「?」の文字が無数に浮かび上がっているのは、言うまでもないだろう。

そして、私は気づいたのだ。

スマホには未来にのみ行ける事が可能なら、タイムスリップ能力を持っていることに……。

「ノーベル賞ものだな……」

私はボソッと呟き、急いでパソコンに向かって女神信仰の章を終わらせにかかる。

「……」

その様子には、過去の……ＹｏｕＴｕｂｅを見ていた自分の面影はなかった。

それはまるで、魔王に対峙する勇者のような覚悟を決めた男の表情だ。

「……」

私は無言で、過去の私の功績であるレジュメとパソコンを交互に見ながらキーボードをかなりのスピードで打った。

だが、その脅威の集中力も、とある音に乱されてしまう。

「……ん？　雨か？」
窓からパラパラと雨が降る音が聞こえてきたのだ。
私は窓を開けて空を見上げた。
先程まで晴れていた天気とはうってかわって、雲に覆われ雨が降り始めていた。
あぁ、散歩に行かなくて良かったと思えた。
「……」
私は作業を再開しようとする。
しかし、再び作業を阻む音が私の耳に入ってくる。
―ゴロゴロゴロゴロ―

「えええぇ……」
遠くから小さめだが、雷と音が響いてきたのだ。
それを聞いた私は明らかに嫌そうな声をあげて肩を下ろした。
私は雷が嫌いだ。
音が怖い。
あと、いきなり鳴り響く轟音がとても心臓に悪いのだ。
「……音楽聴くか……」

私は心底嫌そうな表情を浮かべながら、イヤホンを両耳に入れて、比較的大きい音量の音楽を聴いた。
そうすることで、ある程度の雷の音を緩和できるからだ。
雷が鳴った時は、必ずそうしている。
さらに、スマホを手に取り雷レーダーを検索。
雷が何処で鳴っているか、1時間後にはどのような動きをしているかを確認するのだ。
「あぁ、よかった。こっちに来る感じでは無いな……」
雷レーダーを確認したところ、どうやら私のいる場所からは大きく逸れるようだ。
私は安堵の表情になり、イヤホンを耳から外し、再び卒業論文の作業へと戻った。
「えーと、山の神様が女神様とする場合……大抵の場所ではオコゼという魚が登場する。この魚は非常に醜い顔をしており、それを見た山の神様が自身よりも醜い顔がいると喜ぶからだ。と……」
私が山の神様を好きと思った原因が、この女神信仰にある。
普通、神様といえば威風堂々としたイメージを持つが、この山の神様は非常に醜い顔をして、更に嫉妬深い性格をしている。
この人間臭さに惹かれてしまったのだ。

「あぁー、そんで……マタギは狩猟に赴く際、オコゼを懐に忍ばせる事で山の神様からの恩恵を得ようとする……と」

私は一通りキーボードを打ち終えて、大きく息を吐いた。

「あと少し……あと少しで終わる……」

私は唸るような声をあげて背伸びをして、再びキーボードを打った。

卒業論文なんて誰か考えたんだよ……。

もう、単位ぽんって出して卒業でええやん……。

何故、数万文字を書かないといけないんや……。

手が死ぬぞ……こんなん……。

「……とりあえず、オコゼの写真を載せて……文字数稼ぎにオコゼの事も書くか……」

私はオコゼの資料を見て、文章を丸パク……作成する。

「えーと地方では、オコゼの骨を……いやまて、これ必要か？」

激しく打っていた手を止めて、考えを巡らせる。

……文字数稼ぎするか！

そう結論に至った私は手を動かした。

そして、暫くキーボードをカタカタと打ち……。

「よっしゃーーーーーーー!!　2章女神できたーーーーーーーー!!!」

私は第2章の女神態の山の神を完成させて、ベッドの上に立ち、バンザイしながら叫んだ。

本当に長かった。

結局、昼に終わらせる予定が夕方になっちまった。

いやぁ、時間跳躍能力を持ったスマホは危険だなー。

「よし、保存保存ー♪」

私は超ルンルンな気分で保存をクリックしようとした。

次の瞬間――――。

―ゴロゴロドーーーン！―

「っ!!???」

雷が落ちた音が大きく轟き、私は体をビクつかせて窓を見た。

その速度は雷の速度より速かった自信がある。

なんか近くなってねーか？

私は急いでイヤホンを耳に押し込んで、雷レーダーを検索する。

「おいこっちに近づいとるやんけ!!」

私はキレ気味にスマホに向けて言い放った。
そして、ピカッと外が光る。
少し時間を置いてから、雷の音が鳴った。
「……もう、こっち来んなよー!!」
私は雷とスマホにキレ散らかして、再度保存ボタンをクリックしようとする。
―ビガッ!!!―
―ゴロゴロドゴーーーーーーン!!!―
「わあああああああああああああ!!!?」
光った、その一瞬で雷の轟音が私の耳をぶん殴った。
更に恐ろしい事が起こる。
付けていた電気がフッと消えたのだ。
停電である。
そう、停電である。
「え、嘘っ!? ちょ待って!!?」
私は嫌な汗を流しながらパソコンの画面を見る。
デスクトップ画面に映るのは、黒い画面に映る私のクソ醜悪な顔だった。
卒業論文は保存していない……。

「いやあああああああああああああああああああああああ！！！！！」
私は仄暗い部屋の中で断末魔をあげて倒れた。
今日作った文章が完全に水の泡と化した瞬間だった。
「また第2章から始めんのかよおおおおおおおおおお！！！」
私の魂の雄叫びは、再び近くに落ちた雷によって掻き消された。
この1日で、私は覚えた事が２つある。
１つ、保存は定期的にしておく。
２つ、雷に対する殺意。

続く

皆、保存は定期的にした方がいいよ。
本当に……。